

## コロナ禍の修学旅行 東北での「震災学習」に熱視線

窪小谷菜月 2020年10月6日 11時00分



大川小の旧校舎を背に、語り部の佐藤敏郎さん(左)の話を聞く昭和中の生徒たち=2020年9月8日午後3時41分、宮城県石巻市、窪小谷菜月撮影



えば、何十万人も亡くなる未来は変えられる」という佐藤さんの呼びかけに、真剣なまなざしで向き合っていた。

話を聞いた東原涼々音(つかはらすずね)さん(15)は「校舎を見て、こんなにも簡単に流されてしまうのかと思った」と圧倒された様子。「自分や家族の命を守るためにはどうすればよいか考えた」

同校は当初、修学旅行先を東京にしていたが、新型コロナを考慮して断念。担任の古川晃教諭が宮城県を選んだ。「同じ東北なのに子どもたちは震災を知らない」と感じていたという。昭和村は山間部にあり、地震の影響もほとんどなかった。「津波を経験していない子どもたちこそ、被災地を訪れ直接話を聞くことが大切だ」と考えた。

高校生との交流もあった。宿泊先となった松島町のホテルでは、震災伝承活動に取り組む七ヶ浜町の高校生6人による紙芝居を見た。

上演後、高校生たちに「学校に津波は来たのですか」と質問した五十嵐広華さん(15)。五十嵐さん自身は震災当時、揺れに気づかず家で寝ていたという。「正直、これまで震災は自分には関係

ないと思っていたけど、地震や津波の怖さを初めて知った」と明かす。「村には土砂崩れが起きそうな場所もあるので、家に帰ったら家族に話したい」と語った。

一方、紙芝居を上演した松島高3年の伊藤葵亜梨(きあり)さん(17)は「隣の県でも震災を知らない同世代がいるのだと思った」と驚きつつ、「コロナがきっかけでもいいから、震災について考えて欲しい」と話した。

日本旅行東北(仙台市)によると、宮城県内を修学旅行で訪れる学校は「前年より3割ほど増えている」(担当者)という。いずれも新型コロナの影響だ。

東北地方の学校が関東から行き先を変更しただけでなく、北関東や関西地方などの学校が感染が少ない東北地方を選んでいるのだという。特に人気なのは、震災学習ができる施設や語り部が多い宮城県や岩手県。行き先を巡っては、保護者から「これを機に被災地に足を運ばせて欲しい」と要望のあった学校からの問い合わせもあるという。



交流会では、仙台育英高1年の阿部遙斗(はると)さん(16)が「みなさんも未来に語り継ぐ1人になりましたか」と昭和中の生徒たちに語りかける場面もあった。

震災当時はまだ幼稚園生。昭和中の生徒たちと1歳しか違わない。津波が引いた後に見えたのが自分の町とは思えなかつたが、自宅に被害はなく、身近な人も無事。「震災への恐怖心は薄かった」

中学生になって、学校の震災学習で災害公営住宅や被災地などを訪れ、被災者の話を聞いた。「『震災』を知って、その恐ろしさも知った」。もし自分がその場にいたら、正しい判断ができただろうかと考えるようになったという。今は、伝承活動をする七ヶ浜町の高校生グループ「きずなFプロジェクト」の一員として活動している。

「震災を覚えていないから語ってはいけないということではない」と強調した。これから震災を語り継ぐのは自分たちの世代。「実際に被災地に行って見たり聞いたりして、画面で感じ取れないものを学んで欲しい」。自然と声が大きくなっていた。(窪小谷菜月)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.